保健婦の現在の育児観 ―紙おむつを中心に―

研究第3部　加藤　忠明

Ⅰ　研究目的

日本では、従来おむつといえば布おむつとおむつカバーの組み合わせが一般的に使われていたが、1980年代前半に高分子吸収体を使用した改良型紙おむつ（使い捨ておむつ）が開発され、1987年の紙おむつの転換率（紙おむつ数量÷年間おむつ取り替え回数×100 ）はスウェーデン100 %、フランス98%、西ドイツ90%、アメリカ75 %と報告されている[1]。日本ではまだ２５%であるが[1]、首都圏を対象とした花王㈱の調査では1984年11%、1985年22%、1986年30%、1987年42%、1988年60%、と報告されているので、今後増加することが予想される[2]。

現在、紙おむつなど便利な育児用品が一般に市販されているが、それらの使用の功罪に関しては、専門家でも意見が分かれることが多い。また、生活の多様化とともにいろいろな育児観がみられる。それらに関して現場で育児相談や保健指導を行っている保健婦に質問紙調査を行い、保健婦の現在の育児観を分析すると同時に、母子保健や育児に関する情報をどこから得ているか知り、より良い指導が行えるように現状を分析したい。

Ⅱ　対象と方法

全国の保健所に対して質問紙を1988年７月に郵送し、1833名の保健婦より有効回答を得た。保健婦の年齢は、20歳代37.4%、30歳代45.8%、40歳代11.9%、50歳代4.7 %であり、子どもなしは26.5%、子ども1 人が23.8 %、２人33.8%、３人以上15.9%であった。

Ⅲ　結果

1．育児観に関する因子分析

紙おむつ使用の是非など保健婦の現在の育児観に関する24個の質問項目を、因子分析した結果に基づいて次頁の表に示す。因子分析に関しては、バリマックス回転後の因子負荷量を第５因子まで算出した中で、±0.20を超えたものを表に示す。

第１因子は、紙おむつそのものの性能に関しての考え方である。布おむつと比較して紙おむつの方が吸収はよいが、他の性能はあまり良くないと感じている保健婦が多かった。他の母親対象の調査[3]と比較して否定的な意見が保健婦に多かった。保健婦の年代別の比較では、紙おむつの方が良いと思わない割合が20歳代の28.5%に対し、50歳代では54.3%と年配者ほど多く、実際に紙おむつを使用したことのない保健婦に否定的な意見が多かった。紙おむつの方が、赤ちゃんに（やや）良い 2.0%に対し、母親に（やや）便利85.0%は対照的であった。

第２因子は、便利な育児用品を育児に使うことの是非に対する考え方である。意見が大きく分かれていたが、保健婦の年齢による考え方の差が大きかった。全部紙おむつだと手抜き育児であると思う割合は、20歳代の10.9 %に対し、50歳代では38.6%であり、紙おむつは資源の無駄使いであると思う率は、20代13.3%、50代36.1%であった。

第３因子は、女性の社会活動への参加に対する考え方である。（ややそう思うも含めると）それが可能になるように保育の充実を94.9%、また夫の積極的育児参加を96.9%の保健婦が望んでいた。ことに20～30歳代でそう思う保健婦が多かった。

第４因子は、昔と比較した現在の乳幼児を取り巻く状況に対する考え方である。どちらともいえない、または余りよくないと感じている保健婦が80%以上を占めていた。年配の保健婦ほど今の状況が良くないと思っている割合が多かった。

第５因子は、伝統的な母子の生活に関する考え方であり、意見が分かれていた。保健婦の年齢別の比較では、３歳までは母親の手で育てるべきであると思う割合が、30歳代は18.9%と最も少なく、50歳代は53.2%と多かった。

2．おむつに関する指導

日頃のおむつの指導について、布か紙かの選択を問われた場合は、母親の好みでよい15.3%、布おむつがよい 8.5%、基本的には布を使用し、夜や外出時には紙を使ってもよい57.0%、紙おむつがよい 0.1%、その他19.1 %であった。母親の好みでよいと回答した保健婦の割合は、若い保健婦ほど多く、４歳以上の子どものみをもつ保健婦 520人中 9.8%に対し、０～３歳の子どものいる

表　紙おむつ使用の是非など保健婦の育児観

	因子分析					割合(%)				
因子	第1	第2	第3	第4	第5	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
固有値	2.78	1.34	1.31	0.89	0.62					
寄与率%	11.6	5.6	5.5	3.7	2.6					
累積%	11.6	17.2	22.7	26.4	28.9					
紙おむつの方が赤ちゃんに良い	.61	.28				0.5	1.5	37.8	26.3	33.9
紙おむつの方が肌ざわりが良い	.59					5.5	11.1	30.2	25.0	28.2
紙おむつの方が衛生的	.55					7.5	12.6	44.2	20.2	15.5
紙おむつの方が吸収が良い	.50					29.9	29.0	22.4	9.7	9.1
紙おむつの方が長いスキンシップ	.50					2.0	5.7	23.6	23.9	44.8
紙おむつの方がかぶれやすい	−.36	−.34				18.2	21.7	43.6	10.5	6.0
紙おむつの方が母親に便利	.21					49.4	35.6	10.0	3.0	2.0
全部紙おむつだと手抜き育児		−.67				16.2	18.7	31.1	16.1	17.8
紙おむつは資源の無駄使い		−.55				20.2	30.3	23.3	14.6	11.7
布おむつの洗濯は愛情表現		−.49			.27	20.6	24.2	27.6	16.3	11.3
紙おむつの方がおむつ離れが遅い		−.40				19.9	23.7	35.2	10.2	11.1
布おむつの方が経済的		−.26				55.5	24.3	13.1	3.5	3.6
便利品は大いに利用した方が良い	.25	.28	−.24			19.7	30.9	35.4	11.2	2.9
ベビーフード利用は手抜き育児		−.53				6.0	19.7	37.8	26.1	10.4
保育の充実をはかることに賛成			−.61			76.2	18.7	3.8	0.6	0.6
夫の積極的育児参加が望ましい			−.57			75.8	21.1	2.5	0.3	0.4
女性は大いに社会進出すべきだ			−.52			36.4	29.6	31.7	2.0	0.4
少しでも自分の時間を待ちたい			−.42			33.0	31.5	22.7	8.8	4.0
昔に比べ今の育児はよい				−.63		0.6	3.4	53.4	30.6	12.0
今の母親は母性が豊か				−.60		0.3	1.3	43.6	40.3	14.5
早期教育は子どもにとって必要				−.39		4.3	9.7	45.9	25.7	14.4
3歳までは母親の手で育児を					.56	24.5	30.1	30.8	7.6	7.0
母親の生活は子ども中心に					.48	8.2	27.7	33.9	21.0	9.2
育児は代々教わった方法で					.33	2.7	15.4	60.2	15.9	5.7

保健婦 788人中では19.5%と多かった。

3．母子保健や育児全般に関する情報源

母子保健の情報をどこから得ているかという質問では1833名中利用の最も多かった雑誌は「地域保健」で 576名、以下「生活教育」 496名、「保健婦雑誌」 307名、「愛育」 270名、「母子保健情報」 143名と続いていた。新聞等の刊行物の利用では多い順に「母子保健」 646名、「家族と健康」 352名、「母子健康センター」 220名、「家族計画」 145名、「朝日新聞」 115名であった。講演や研修は77名であり、その他、各種の新聞、各種の育児雑誌、「小児保健研究」などの専門誌がそれぞれ数十名いた。

育児全般の一般的な情報をどこから得ているかという質問で最も多かった雑誌は「ざ・おむつ」で 332名、以下「ベビーエイジ」 187名、「地域保健」 163名、「生活教育」 151名、「ピーアンド」 116名と続いていた。新聞等の刊行物の利用では多い順に、メーカー等のパンフレット類 243名、「母子保健」 193名、「家族と健康」 106名、「母子健康センター」81名、「朝日新聞」69名であった。デパートや店頭で実物を見て71名、テレビやラジオ33名であり、その他、各種の育児雑誌、各種の新聞などがそれぞれ数十名いた。

4．自由意見

自由記載に関しては、紙おむつの問題点として交換回数、ことに広告をうのみにして回数が少ないことが困るが、こまめに交換（ぬれたら取り換え）すれば、問題がないという意見が最も多かった。その他、おむつかぶれ、おむつ離れ、ゴミ処理、経済性、メーカーによる差、股関節開排制限のある乳児への使用、などの問題があげられていた。しかし、紙おむつは、個々の子ども、また各々の家庭に合った使い方を工夫して上手に利用すれば良いという意見が多かった。

育児全般に関する自由記載では、各々の保健婦が真剣に現在の母子の実情を考え模索している様子がうかがえた。全てをまとめることは紙面の都合上困難であるが、「時代の流れと共に種々の育児用品、製品が市販され、それらに関して、また育児全般に関しても情報が混乱している。何が良い悪い（例えば、布おむつ＝良い、紙おむつ＝手抜き＝悪い等）ではなく、育児を取り巻く環境全体（例えば、便利な育児用品が出回り、余裕がでて余った時間を親子が共に有益に過ごすためにはどうしたら良いか、また逆に、生活に追われ育児について考える余裕のない親についてはどうしたら良いか等）を考えながら、種々の情報を親自身が考えながら整理（例えば、紙おむつの長所や欠点）できるよう、保健婦として指導していきたい。メーカーの広告をうのみにした育児をするのではなく、育児の基本的な部分（育児は本来どうしても時間と手間がかかるものであり、その過程、母子の気持ちのふれあいが大切である。）を見失わずに、地域社会の実情に合わせて、できれば、父母が話し合いながら、母親がのびのび育児をしてほしい。そのためには正しい情報をもとにした育児に関する議論をもっと高めてほしい。」という意見が比較的多かった。

Ⅳ 考察

因子分析の結果は、累積寄与率が第5因子で28.9%と低かったので、各因子は保健婦の様々な育児観の中で小さな面のみをとらえていると考えられる。育児観や母性の問題はデリケートな部分が多く、単に＋－では表現しづらい面が多くあるのであろう。

第1、2、3因子をあえて2次元で表示すると、紙おむつ肯定派、便利な育児用品肯定派、また女性の社会参加肯定派とは、お互い関連していた。女性が社会参加するために、便利な育児用品は都合が良いが、紙おむつの性能に関しては多少不安を持っている保健婦が多いようであった。

因子分析した多くの質問項目に関して保健婦の年代別の考え方の差は大きかった。各々の年代の保健婦は、専門的知識をいかしながらも、自分自身の生活、また子育てのことを念頭においた考え方、育児観が主体であるように考えられる。若い保健婦ほど、保育の充実や父親の育児参加を求め、便利な育児用品は上手に利用していきたいと考えているなど、現在の育児を取り巻く状況を現実的にとらえているようであった。3歳までは母親の手で育てるべきであると思う割合が30歳代で最も少なかったのは、現実に子育てをしながら仕事をしている保健婦が30歳代に一番多いからであろう。

おむつに関しては、紙おむつの行き過ぎた広告を問題視する意見は多かったが、使い方を誤らなければ、布おむつでも紙おむつでも、各々の家庭の判断で良いと考えられる。

育児の情報源として保健婦の回答が最も多かった「ざ・おむつ」は、紙おむつパンパースを開発しているP＆G社が提供している情報誌である。その中にはメーカーとして紙おむつに関して知ってほしい内容が多く記載されているが、読者である保健婦はそれをそのままとらえずに、より主体的な自分達なりの意見をもっていた。保健婦達は、昔からの育児のあり方の良さを多く認めながら、便利な物は適宜使用（指導）してみて試行錯誤して

いると考えられる。

日本は単一民族単一言語であり、必要があれば専門的な種々の情報を一般の人々はすぐ知ることができる。しかし、ことに育児情報に関しては、専門的立場で種々の角度から議論を重ねた上で、一般化されることが望まれる。現在の保健婦達はその一翼を担っていると考えられる。

V 結語

全国の保健所保健婦1833名を対象に、紙おむつ使用の是非など、現在の育児観に関する質問紙調査を行った。女性の社会活動への参加、便利な育児用品使用、紙おむつ肯定とは、因子分析によればお互い関連していた。女性の社会活動への参加は肯定する保健婦が多かったが、紙おむつの性能、また、便利な育児用品の使用の是非に関しては、保健婦の年齢による考え方の差が大きく年配の保健婦ほど否定的であった。おむつに関しては、適切な使い方をすれば、布でも紙でも良いと考えられる。

本研究は、東京都母子衛生課、住友眞佐美、育児研究会、高橋良枝、花王㈱第2家庭品センター、奥田真知子と共同で行い、第36回日本小児保健学会において報告した。また、回答いただいた全国保健所の保健婦、および御指導御鞭撻いただいた日本総合愛育研究所平山宗宏所長、花王㈱第2家庭品センター荒澤敦子室長に深謝いたします。

参考資料

1) 日本衛生材料工業連合会：紙おむつのQ&A. 1987.
2) 高橋悦二郎：新しい育児用品（おむつ、哺乳びん等）. 小児科診療, 50 (1)：64～67, 1987.
3) 伊豆幸子, 他：紙オムツ使用に関する実態調査, 第34回日本小児保健学会講演集：B53, 1987.

The Viewpoint of Public Health Nurse about Child Rearing

-- mainly about disposable diaper --

Tadaaki Kato

The Questionnaires about child rearing (using disposable diaper et al.) were mailed to all the public health center in Japan at July, 1988. The effective answers of 1833 public health nurses were gotten. Their ages were twenties 37.4 %, thirties 45.8 %, forties 11.9 %, and fifties 4.7 %. The relationship of viewpoint was found by factor analysis among the participation of women in social activities, the use of convenient utensils for child rearing, and the approval of disposable diaper. Many nurses agreed the participation of women in social activities. But the difference of nurse's age was found largely about the viewpoint of convenient utensils (disposable diaper et al.) for child care. Many elderly nurses disagreed the use of convenient utensils.

Now many kinds of utensils for child care are sold. The informations about them and also about the rearing practices are confused. Many nurses wanted to guide the parents as they could arrange lots of informations by themselves considering their whole environment surrounding child care. The mothers were desired to care their children at ease fitting their own regional societies, considering the fundamental part of nursing. For that purposes many nurses wished to have more arguments about child care on the basis of correct informations. It is considered that both disposable diaper and cloth are able to have no problem if they are used suitably.